

平成 21年 5月 1日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17320125
 研究課題名（和文） 弥生時代における北部九州と朝鮮半島における交流史の考古学的研究
 研究課題名（英文） Archaeological Research on the Relationship between Northern Kyushu and Southern Korean Peninsula of the Yayoi Period
 研究代表者
 宮本 一夫（MIYAMOTO KAZUO）
 研究者番号：60174207

研究成果の概要：1952年に東亞考古学会によって発掘調査された壱岐カラカミ遺跡資料には、楽浪土器や三韓土器などが出土しており、弥生時代の対外交流史を考える上で重要な遺跡であった。しかし、これらの資料は永らく公開されないままであり、またその位置付けも不明なままであった。本研究では、カラカミ遺跡の東亞考古学会調査付近を再発掘することにより、東亞考古学会資料を再評価し、楽浪土器や三韓土器の位置づけを明らかにするとともに、遺跡の総合的な評価から、弥生時代の対外交流史を明らかにするものである。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	4,100,000	0	4,100,000
2006年度	3,300,000	0	3,300,000
2007年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2008年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
年度			
総計	14,500,000	2,130,000	16,630,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：考古学、対外交流史、カラカミ遺跡、東亞考古学会、壱岐、弥生時代、楽浪土器、三韓土器

1. 研究開始当初の背景

カラカミ遺跡は、1952年に東亞考古学会によって発掘調査され、また1977年に九州大学考古学研究室によって発掘調査されながらも、それらの資料は公開されないままであった。さらに、その後の長崎県教育委員会の遺跡範囲確認調査によって、カラカミ遺跡が環濠集落である可能性が高まったが、その遺跡が弥生時代の対外交流史上あるいは壱岐の先史時代において如何なる位置づけに

あるかは不明であった。

2. 研究の目的

1952年の発掘調査では楽浪土器や三韓土器が出土し、楽浪郡や朝鮮半島南部との交流が存在することが明らかとなっていたが、その交流の実態やそもそもそれらの資料が遺跡のどのような環境から出土したかも不明であった。とりわけ、それら発掘資料が公開さ

れておらず、資料分析も不可能な状態であった。2004年の試掘調査により、東亜考古学会調査地点付近にも環濠などの遺構や遺物が良好に存在している可能性が高まった。そこで、東亜考古学会調査付近で再発掘調査を行うこととし、その調査成果から、東亜考古学会発掘資料を位置付ける、あるいは再評価することにより、楽浪土器・三韓土器を含めた弥生時代の対外交流の実態を復原するとともに、カラカミ遺跡が弥生時代の対外交流に果たした役割を明らかにすることが研究目的である。

3. 研究の方法

1984年にカラカミ遺跡第2地点の様相が一応判明していたので、カラカミ遺跡第1地点を中心として発掘調査を実施した(図1)。これによって不明であった1952年の東亜考古学会発掘調査地点を明らかにするとともに、当時の発掘日誌に示された層位関係を現在の発掘調査によって得られた知見と総合化することにより、1952年調査資料を再評価することとした。また、環濠内土壌や混貝土層の土壌資料を水洗選別することにより、動物骨や炭化植物種子を採集し、当時の食生活や古環境を復原することとした。また、土層内のプラントオパール分析、出土木材の樹種同定、炭化物の放射性炭素年代など理化学的調査分析も取り入れ、総合的にカラカミ遺跡の歴史的な位置づけを行うことから、1952年東亜考古学会資料を再評価することとした。

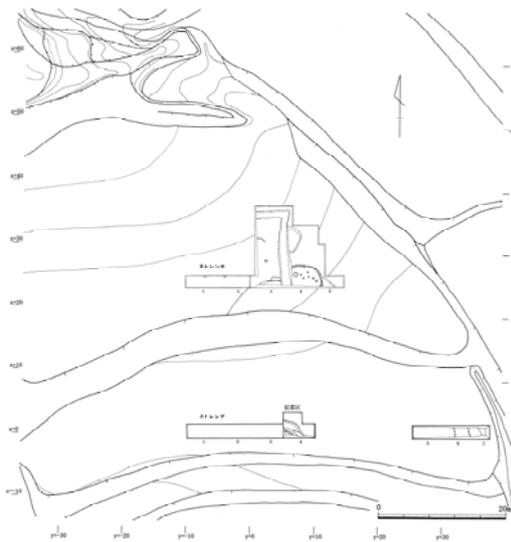


図1 第1地点のトレンチ配置

4. 研究成果

2005年～2008年によるカラカミ遺跡発掘調査により、香良加美神社が位置する丘陵を

囲むように弥生時代の環濠が存在することが推定された(図2)。また、カラカミ遺跡は弥生時代中期後葉から弥生時代終末期・古墳時代初頭という時期に限られた集落遺跡であることが明らかとなった。



図2 環濠の想定配置図

1952年の東亜考古学会調査区はこれらの環濠の外側に位置することが確かめられた。中でもカラカミ遺跡の環濠東側に位置する第2地点付近からは、楽浪土器や三韓土器が集中的に出土しており、渡来系の人々が集住していた可能性もある。一方、南側に位置する第1地点からは住居址4棟など多数の遺構が発見された。その中でも、2号住居址や4号住居址は鉄生産に係わる住居址である可能性がある。また、弥生後期の4層からは鍛冶炉が3基以上発見されたとともに、鞆の羽口も発見され、第2地点は集中的に鉄器の鍛冶生産が行われていた集落地点である可能性が高い。

一方、4層からは40個体以上の大形アワビの殻が集中して出土しており、アワビおこしの出土とともに、集中的にアワビの採集が行われていたことが明らかとなった。漁撈具の存在からもカラカミ遺跡の住民は漁撈民である可能性が高い。集中的にアワビの採集が行われていることは、自家消費というよりは干しアワビとしての交易の対象品であった可能性が高い。鉄器の加工なども交易の対象として遺跡内で再加工されていた可能性が高い。一方では土壌のフローテーションによって多量に発見されたコムギあるいはコメは、周辺の地形環境からすれば、ここで生産

されていた可能性もあるが、一方では交易によってもたらされた可能性の方が高いであろう。さらに、糸島系の土器以外に遠賀川以東系土器など他地域系統の土器も多数出土しており、楽浪土器や三韓土器の存在とともに、カラカミ遺跡が交易拠点であった可能性を物語っている。

壱岐・糸島系の弥生土器が多数出土した韓国南海岸の靉島遺跡は、同じく交易拠点の遺跡であるが、その存続年代は弥生中期初頭から後期初頭までに併行している。カラカミ遺跡は弥生中期後葉にはじまり、古墳時代初頭に終焉を迎えることから、両遺跡は年代的に言って相互補完的な関係にある。すなわち壱岐・糸島系住民が靉島に直接赴いて交易を行う段階から、壱岐に交易拠点を置いて対外交渉を行うという、対外交渉関係の転換が図られたのがカラカミ遺跡の突然のはじまりと関係しているであろう。

このように、カラカミ遺跡の再調査により1952年の東亞考古学会資料を正當に評価することが可能となるとともに、カラカミ遺跡の性格を理解することが可能となった。さらには弥生時代における対外交渉史の転換とその構造を明らかにすることができたのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

- ① 辻田淳一郎、北部九州における竪穴式石槨の出現、史淵、145 輯、25-56、2009、査読無し
- ② 宮本一夫、細形銅剣と細形銅矛の成立年代、弥生時代のはじまり、第 3 巻、9-23、2008、査読無し
- ③ 岩永省三、内裏改作論、九州大学総合研究博物館研究報告、第 6 号、81-105、2008 年、査読無し
- ④ 宮本一夫、遼東の遼寧式銅剣から弥生の年代を考える、史淵、145 輯、155-190、2008 年、査読無し
- ⑤ Junichirou Tsujita, Formation and Transformation of the Prestige good system and Identity: the case of the Japanese Archipelago from the 3rd through the 5th Centuries, East Asia and Japan: Interaction and Transformations, Vol. 4, 53-89, 2007、査読無し
- ⑥ 辻田淳一郎、古墳時代前期における鏡の副葬と伝世と論理—北部九州地域を対象として—、史淵、144 輯、1-33、2007 年、査読無し
- ⑦ 宮本一夫・辻田淳一郎・牛島恵輔・水永秀樹・田中俊昭・黒木貴一、福岡市西区元岡池ノ浦

古墳・峰古墳の墳丘測量調査と電気探査の成果、九州考古学、81 巻、53-70、2006 年、査読あり

- ⑧ Koji Mizoguchi, Genealogy in the ground: observations of jar burials of the Yayoi period, northern Kyushu, Japan, Antiquity, Vol. 79, No. 304, 316-326, 2006、査読あり
- ⑨ 岩永省三、大嘗祭移動論、九州大学総合研究博物館研究報告、第 4 号、99-132、2006 年、査読無し
- ⑩ 宮本一夫・辻田淳一郎・牛島恵輔・水永秀樹・田中俊昭・今井隆博、福岡市西区元岡・塩除古墳の墳丘測量調査と電気探査の成果、九州考古学、80 巻、69-83、2005 年、査読あり

[学会発表] (計 1 件)

- ① 宮本一夫、Prehistoric interaction through Tsushima and Iki islands between the Korean Peninsula and the Japanese archipelago、Society for East Asian Archaeology、2008 年 6 月 3 日、中国社会科学院考古研究所、北京

[図書] (計 4 件)

- ① 宮本一夫、辻田淳一郎ほか、壱岐カラカミ遺跡Ⅱ—カラカミ遺跡東亞考古学会第 1 地点の発掘調査—、1-151、2009 年
- ② 宮本一夫、溝口孝司、田中良之、辻田淳一郎、岩永省三ほか、九州と東アジアの考古学—九州大学考古学研究室 50 周年記念論文集—、1-974、2008 年
- ③ 宮本一夫、辻田淳一郎ほか、壱岐カラカミ遺跡Ⅰ—カラカミ遺跡東亞考古学会第 2 地点の発掘調査—、1-148、2008 年
- ④ 田中良之、岩永省三、宮本一夫、辻田淳一郎ほか、東アジア古代国家論—プロセス・モデル・アイデンティティー—、1-385、2006 年

[その他]

ホームページ等

<http://lit.kyushu-u.ac.jp/~kouko/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮本 一夫 (MIYAMOTO KAZUO)
九州大学・人文科学研究院・教授
研究者番号：60174207

(2) 研究分担者

辻田 淳一郎 (TSUJITA JUNICHIROU)
九州大学・人文科学研究院・准教授
研究者番号：50372751

(3) 研究分担者

田中 良之 (TANAKA YOSHIYUKI)

九州大学・比較社会文化研究院・教授
研究者番号：50128047

(4) 研究分担者

岩永 省三 (IWANAGA SHOZOU)
九州大学・総合研究博物館・教授
研究者番号：40150065

(5) 研究分担者

溝口 孝司 (MIZOGUCHI KOJI)
九州大学・比較社会文化研究院・准教授
研究者番号：80264109